

2019年度愛知県がんセンター公開講座(第4回)のご案内

「令和元年 肺がん治療の最前線」

= 令和元年11月9日(土)開催 =

< 講師からのメッセージ >

「肺がん診療の現場では？」

毎年12万人以上の方が肺がんと診断され、難治性のため多数の患者さんが亡くなってきました。しかし近年、診断・治療法の飛躍的な進歩により、ゲノム医療の臨床への導入、さらに免疫治療の開発も日進月歩で進み、肺がん治療を取り巻く環境も劇的に変化して来ています。効果の乏しかった肺がん患者さんでも劇的な効果が得られる事もあり、今後は、効果の得られる患者さんの割合を増やすべく、また、その効果をいっそう高めるべく、さらに、効果の見られなくなった患者さんに再び効果が得られるような治療開発が行われています。

副院長兼呼吸器内科部長 樋田 豊明

< 講師からのメッセージ >

「肺がんの胸腔鏡手術、ロボット手術」

肺がんの低侵襲手術(胸腔鏡手術やロボット支援手術)の進歩は著しく、安全性も技術の進歩により高まっています。

2013年に導入した胸腔鏡手術は、安全性・根治性どちらも安定した治療成績を達成しています。9割以上の患者さんが手術当日離床・ドレーン抜去、平均3日未満の早期離床・早期退院が可能となっています。

更なる美容性の追求に、ひとつの操作孔のみで手術を行う単項式胸腔鏡を区域切除で開始しました。また、当院では胸腔鏡と同じ視野で行う当院オリジナルのロボット手術を手掛けています。当科の取り組みをご紹介します。

呼吸器外科部長 黒田 浩章

< 講師からのメッセージ >

「がん免疫療法の進展」

肺がんに対する治療はこれまで手術、放射線療法、薬物療法が中心でした。しかし、昨年のノーベル賞受賞で話題となった「免疫チェックポイント阻害剤」の開発により、免疫療法が肺がん治療にどんどん組み込まれるようになってきました。ただ、この薬もまだ一部の肺がん患者さんにしか効果を示しません。多くのがん種の中でも特に肺がんは、それぞれの患者さんが持つがんに対する免疫応答を適切に活性化することでさらに治療効果が得られる可能性があります。本講演では、肺がんに対する免疫チェックポイント阻害剤の現状と、さらに治療効果を引き上げるための今後のがん免疫療法の展望についてお話しします。

腫瘍免疫制御トランスレーショナルリサーチ分野長 松下 博和

< 講師からのメッセージ >

「肺がんの薬物療法について」

進行肺がんに対する治療の中心は薬物療法です。近年の肺がんの薬物療法の進歩は目まぐるしく、次々に新しい薬剤が世の中に出てきています。中でも、がん細胞の遺伝子変異のタイプによって使い分ける「分子標的治療薬」、がん細胞に対する免疫反応の抑制を解除する「免疫チェックポイント阻害薬」などが注目されています。一方、こういった新薬のみを使う事で肺がんの薬物療法が完結するという事は少なく、「従来の抗がん剤」をうまく組み合わせることが重要となります。それぞれのお薬の特徴について基本的なポイントにしぼって分かりやすく解説したいと思います。

呼吸器内科部 医長 渡辺 尚宏